

西山本（承空本を含む）の基礎的考察

－花押と奥書から見た筆写活動－

仁 藤 智 子

【キーワード】 篁物語 承空 西山本（承空本） 花押 奥書

はじめに

鎌倉末期に、僧承空らによって京都西山・往生院を舞台に繰り広げられた書写作業は、近年相次いで公刊された冷泉家時雨亭に伝来する蔵書によってはじめて明かされた。この多くは、紙背に書写された多量の歌書と聖教類である。伝来する歌書は五十余冊に及ぶ。【表1】を参照されたい。従来、承空本と称されるのは、(1)～(43)までの41種43冊。(47)清誉という署名がある『柿本人麿集』や(48)恵空の『範家家集』、(50)義空の『忠見集』や不明なもの(44)(45)(46)(49)(51)がある。これらを含む51冊は、承空の周辺にいたと想定される西山派僧侶の一連の書写作業として伝来したと捉えられる。前稿でも述べたが、これらを総体として捉え、西山本（承空本を含む）と総称したい¹。

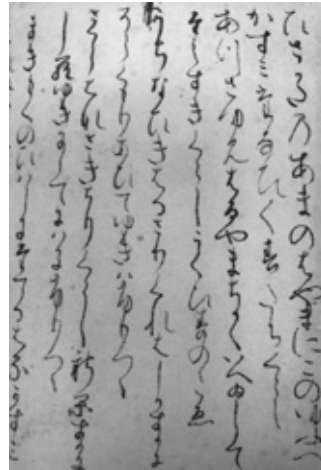
玄観房承空は、鎌倉の有力御家人宇都宮頼綱（法名・実信坊蓮生）を祖父とし、塩谷朝業（法名・信生）を大叔父とする。また父泰綱の姉妹は、藤原定家の子息為家に嫁ぎ、京都歌壇と近い関係を築いていた²。彼が、京都・西山の往生院で書写活動を始めるのが、早くとも永仁二（1294）年ごろと考えられ、その活動は正和二（1313）年ごろまで確認できる。没年は元応元（1319）年とも、元亨三（1323）年とも伝えられる。

西山本の特色は二点挙げられる。ひとつめは、漢字混じりのカタカナで記されてことである。これは、十世紀末に成立した仏教説話集『三宝絵（詞）』などの例からも知られるように、寺院内ではカタカナが使用されていたことを背景とするものである。同時代の藤原資経による歌書の筆写が、漢字混じりひらがなで行われていたのとは大きく異なる。カタカナである点が、西山本の特色の一つである（写真1・2）。

もうひとつは、これらの歌書が紙背文書に筆写されていることである。西山・往生院もしくは承空の周辺にあった紙類の裏を利用している。正倉院文書の例を引くまでもなく、使用された文書の時間的な早い遅いで一次文書、二次文書とい



(写真1：西山本『赤人集』冒頭)



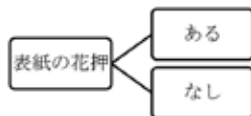
(写真2：資経本『山部集』冒頭)

うならば、文書（紙背文書）が一次文書であり、歌書は二次文書である。両者は密接な関係を持っており、歌書単体だけで論じるのは危険であることは念頭においておかなければならない。といっても、これらの一次文書には、行も気にせずに文字の大きさもまちまちで乱れ書きされたものも少なくない。書状であったものも多く含まれている。これらの文書の接続によって、二次文書の歌書が筆写された順序や西山あるいは承空周辺の歴史的背景が明らかになることは間違いないが、しばし歌書に集中したい。

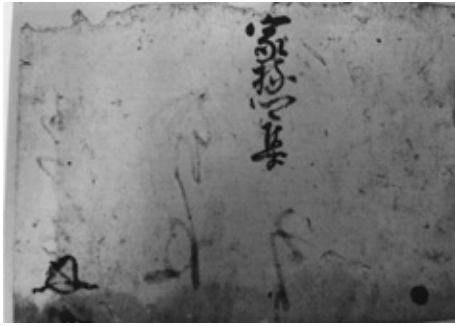
小稿では、それぞれの歌書の表紙の花押と奥書の文言に着目して基礎的な考察を進めていく。

1 表紙の花押による分類

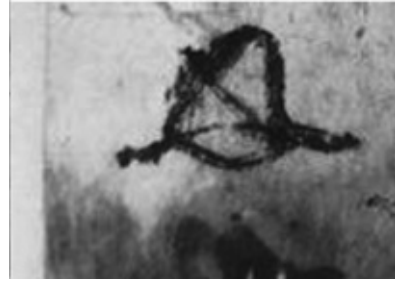
表紙と奥書の状況から西山本を分類してみたい。まず、表紙における花押の有無を見てみると、大部分に花押がある。



西山本のうち承空本【表1】(1)～(43)のうち、性格が異なる(41)～(43)を除く40冊のうち、35冊はみな同じ花押が表紙の左下に書かれている（写真3-1・2）。同一人物が歌書の表紙に花押を書いて、点検または所有を示したと考えられる。一方で、花押のない5冊についてはその理由と事情を考えてみたい。花押のない歌書は、(14) (18) (21) (33) (40)の五冊である。



(写真 3-1：西山本『家持集』)

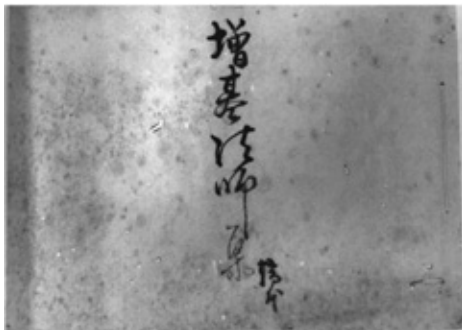


(写真 3-2：花押拡大)

(14) 増基法師集

増基法師は生没年未詳、謎の歌人であるとされている。しかし、円光院関白鷹司基忠の子に、園城寺実相院主増基という僧がいる。鷹司基忠は、父を初代鷹司兼平、母を一条実有の女とする鎌倉末から南北朝期の公卿である。摂政・氏長者を務め、父兼平と共に鷹司家の礎を築いた人物で、歌人としてその名を馳せた³。基忠の庶子が、園城寺実相院の僧・増基 (1282～1354) となる⁴。上述した承空 (?～1319 または 1323) とは同時代を生きたことになり、承空の書写活動 (1294 ?～1313) を加味しても、西山本『増基法師集』の増基であったことを否定できない。ここでは可能性の指摘にとどめて、後考を俟ちたい。

さて、この歌集の表紙は失われて、江戸時代に補充されたことが知られる。表紙の「端本」という表記は、この歌集の後半が失われて不完本であることを示している⁵ (写真4)。つまり、表紙に承空本お決まりの花押が見られないのは、歌書の後半ばかりか表紙も失われてしまっているためであると考えられる。



(写真 4：増基法師集)

(21) 為信集

為信は、近年の研究により、近年藤原文範の子で紫式部の外祖父とされる人物であるとされている⁶。既に、この西山本『為信集』は、欠損部分の位置などから同時代の藤原資経本の転写本であることは指摘されている⁷。表紙の左端は失われているが、承空本独特の花押の右篇がかすかに残る (写真 5-1・2) ことから、

もともと花押は書かれていたが、左端が失われたので見えなくなっていたとすることが許されよう。



(写真 5-1：為信集)



(写真 5-2:花押欠損部分)

(33) 範永朝臣集

本文末に記された監物からも知られるように、平安後期、後冷泉朝に作品を多く残す歌人藤原範永は、地方官を歴任する受領であった。前稿でも触れたが、本書の奥書は、

永仁三年五月十九日於 /
西山往生院書写了 /
右筆屋々丸 (花押)

とある。これによれば、永仁三（1295）年五月十九日に、右筆である屋々丸なる人物が往生院でこの歌集を書写したことになる。しかし、表紙や作者の監物、奥書は同じ人物の筆になるが、本文は別筆であることは明らかである。屋々丸が筆を執ったのは監物など最後の仕上げということになるだろうか。

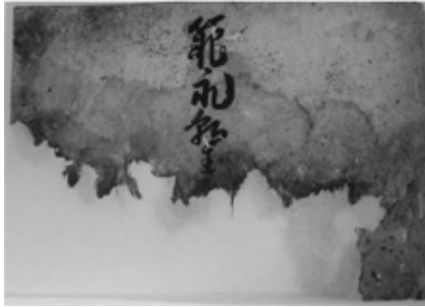
表紙は下から中ほどにかけて欠損しており、花押の存否は確かめることができない（写真6）。しかし、承空の花押のあるほかの歌書と同じく表紙と同じ楮紙であり、本文とも同じ紙を使用していることや、上述した例から花押があったと考えることはあながち無理ではなからう。今後、紙背文書の分析が必要である。

既に指摘されているが、写本は四本、

- ①宮内庁書陵部所蔵本甲本（501・305）
- ②宮内庁書陵部所蔵乙本（501・185）
- ③西山本（冷泉家時雨亭文庫所蔵）
- ④真観本（同上）

が伝来するが、奥書と本文の一致から②は③の転写本であることは明らかで、江戸時代に②が書写された段階で、既に③は現状のような破損していたらしい⁸。真観本の奥書には、

建長六年二月廿七日以病腦之隙



(写真6：範永朝臣集)

書写之自或貴所被下之本也
件草子多以破損仍關其所畢
以他本少女書入畢
五十二老比真觀
此草子別依仰
書献畢

(別筆)永仁四年霜月十三日一見畢 別小々書出之

明月以古歌書番可争勝負之故也

とあり、建長六（1254）年に、真觀（52歳）が病気の合間を縫って破損箇所を補いつつ書写を行ったこと、さらに永仁四（1296）年になって、翌月の歌番勝負のために一見して書き出したことが知られる。奥書の一致により、①は④を江戸時代になって筆写したものであることがわかる。

真觀は俗名藤原（葉室）光俊（1209～1276）で、承久の乱では父の葉室光親と共に筑紫配流の憂き目にあった。帰京後は正四位下、右大弁まで至った。藤原定家に師事し、弟子に鎌倉親王將軍の宗尊親王などがいる。京都と鎌倉歌壇を結ぶ一人であったが、反御子左家の一翼を担ったとされる人物である。

真觀の死後、永仁四年に一見されたこの本は、前年に③西山本が書写されており、ちょうど承空らによって精力的な歌書の書写活動がなされていた時期と重なる。冷泉家時雨亭文庫には、真觀が書写した歌集が伝わっており⁹、時代的には先行する真觀本と西山本との関係も今後の課題になろう。

(40) 城美の前司集

城美の前司は、秋田城介であった鎌倉有力御家人安達（藤原）義景の子安達長景（～1285）である。母方の祖父に、北家師実流の庶流から蹴鞠と和歌を家業とする飛鳥井家をおこした飛鳥井雅経（1170～1221）がいる。祖父雅経は、鎌倉二代將軍頼家、三代將軍実朝にも近く、藤原定家と実朝を和歌で結んだ。長景自身は宗尊親王と親しく、上述した藤原光俊（真觀）と同じように鎌倉と京と歌



(写真 7：城美の前司集)



(写真 5-2：為信集拡大)

壇を結ぶ役割を果たしたが、弘安八（1285）年霜月騒動で一族と命運を共にした。

表紙は楮紙で紙背文書がある(写真7)。本紙と同じ紙を利用していることから、書写段階のものであるということが出来る。「百首和歌」と書いた後に、消し線を施して「家集」と書き、下部に「城美の前司」と書き加えている。左四分の一ほどは失われており、花押のあった可能性は否定できない。奥書はないので筆写事情はうかがえないが、先にみた為信集の「集」と同筆であるので、承空周辺の筆写活動によるものと考えられる(写真5-2)。

(18) 山田集

山田法師なる人物の自選歌集と考えられ、村上天皇の命によって十世紀中葉に成立した勅撰集である『後撰集』などに採歌されていることから、平安中期の歌人であったことがわかる¹⁰。料紙は楮紙で本文と同じ紙である。表紙には「山田集」左下に「菊坊」とある(写真8-1)。また、「集」の文字に着目すると、山田集(写真8-2)と家持卿集(写真3-2)は明らかに同筆である。山田集には花押は認め



(写真 8-1：山田集)



(写真 8-2：山田集拡大)



(写真 3-2：家持卿集拡大)

られないが、花押のある家持卿集と同一人物の手にかかっていることを考えると、承空周辺で筆写されたのは確かであろう。

西山本のうち承空本にあたる【表1】(1)～(43)のうち、性格が異なる(41)～(43)を除く40冊のうち、35冊はみな同じ花押が表紙の左下に書かれているが、花押のない5冊を検討してみた。

(14) 増基法師集は、表紙が失われて戸時代に後補されたために花押がなかったが、もともとの表紙に花押があった可能性は否定できなかった。(21) 為信集には花押の残像があり、花押があったと考えられる。(33) 範永朝臣集と(40) 城美の前司集は、表紙は本来のものであるが、左端が失われたため花押が確認できなかっただけで、花押の存在自体を否定するには至らなかった。(18) 山田集は花押がないものの、他の花押のある承空本と同筆であり、「菊坊」という字句が花押にとってかわられたと考えられる。なお、本書が(3)『小野篁集』と同装丁同型であることに言及し、今後の調査の備忘としたい。

以上のように、現存の状態では花押が見られなかった5冊の歌書も、もともとは花押が存在していたと考えることに無理はない。すなわち、西山本のうち、狭義での承空本(1)～(40)には表紙に同じ花押が書かれていたと想定することができる。花押は、承空による歌書の筆写あるいは所蔵確認として、短期間に書かれており、これが狭義の承空本であるということができる。

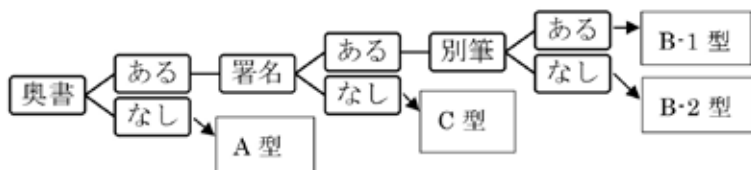
さて、先述したように(18) 山田集には花押がある場所に「菊坊」とあるが、表紙にこのような字句が書かれている例はない。「菊坊」とはいかなる意味であったのか、章を改めて考えてみたい。

2 奥書にみる筆写活動

(1) 奥書による分類

前掲の(18) 山田集の奥書には、
永仁四年七月十三日於西山往
生院菊坊書了
承空

とあり、表紙の「菊坊」が、京都西山にあった往生院の一角の名称であったことがわかる。そこで、次に奥書に着目してみたい。



A型：奥書がないもの

… (1) (3) (14) (21) (25) (26) (30) (36) (38) (40) (42) (44) (47)
(48) (49)。 (51) = 16冊

これらは、(3)『小野篁集』のように完本で奥書がないものと、先にみた(14)『増基法師集』のように後半が欠けているものに二分できる。

B型：奥書があり、署名があるもの

(【表1】で奥書の中で太字のものは署名)

… (2) (4) (15) (18) (19) (20) (22) (24) (27) (28) (29) (32) (34)
(37) (39) = 13冊「承空」の自筆

… (17) (33) = 2冊それ以外の署名があるもの

B-1型：B型のうち別筆「承空上人寄進之」があるもの

… (2) (15) (19) = 3冊

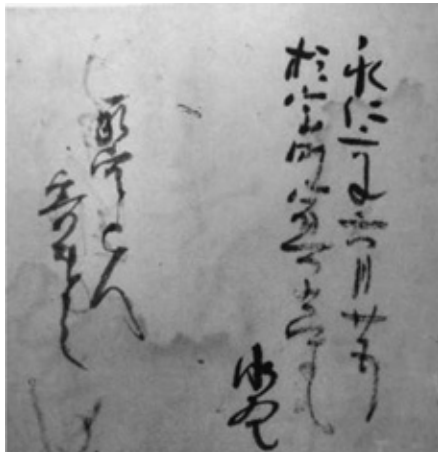
B-2型：上記以外

C型：奥書があるものの、署名がないもの

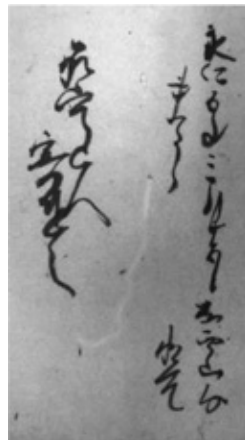
… (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (16) (23) (31) (35) (43)
(46) (50) = 16冊 * (45) は不明

これらのうちB型の別筆と同じ「承空上人寄進之」とないものは、(31) (35) (43) (46) の4冊のみである。C型でそれ以外の12冊とB-1型は、共に承空亡き後にいずれかに寄進したことを記す文言「承空上人寄進之」が明記されるが、前稿で検討したので、参照していただきたい¹¹。

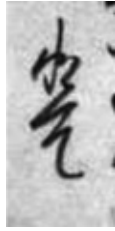
B-1型の典型として(2)『家持卿集』奥書(写真9)を掲げた。同じく(4)『小



(写真9：家持卿集奥書)



(写真10・小野小町集奥書)



(写真 10-1：承空の自筆)



(写真 10-2：後世の別筆)

野小町集』(写真 10) も参照されたい。右側の署名の「承空」(写真 10-1) と左側の「承空上人寄進之」の「承空」(写真 10-2) は、くずし方からみても明らかに別筆である。

このように、西山本は奥書の状況によって三つの類型 (A 型・B 型・C 型) に分けることができる。これが、筆写活動や伝来過程とどのようにかかわってくるかは今後の課題になろう。

(2) 筆写活動の場と時期

次に、先ほど見た「菊坊」が、西山の往生院の一角の場所を指すことは上述した。ほかにも、奥書に場所と思われる語句が散見する。【表 1】を参照されたい。

- ①室町宿所：(2) (15) (19)
- ②西山善峯寺北尾往生院菊坊松窓：(29) (37)
- 西山善峯寺北尾菊坊：(46)
- 西山往生院菊坊：(18) (35)
- 西山菊房：(10) (22) (24) (34)
- 西山房：(4) (27) (28) (31)
- 西山往生院：(32) (33)
- 西山往生院草庵：(17) (20)
- にしやま：(8)

これらの表記から、書写活動の場は大きく二つに分類される。ひとつは①室町宿所である。これは京中の室町に設けられた宿泊施設で、ここで少なくとも (2) 『家持卿集』、(15) 『清正集』、(19) 『藤原元眞集』 が書写されたと考えられる。しかも、書写が終了した年月日が、それぞれ (2) 永仁六年六月廿五日、(15) 永仁六年六月八日、(19) 永仁六年六月廿四日である。つまり、永仁六 (1298) 年六月に、室町の宿所で、

(15) 『清正集』 → (19) 『藤原元眞集』 → (2) 『家持卿集』

の順番で、署名者である承空が、借り受けた歌書から書写したことになる。このほかに、この日時に近い同年五月廿八日に書写された(5)『業平朝臣集』も、同時に書写された可能性がある。室町宿所がどのような場所であるか、現時点では案を持たないが、承空の書写活動を考える上で重要な場所であると留意しておきたい。

もうひとつの②の西山関連のものは、すべて往生院と考えてよいであろう。大部分が永仁五(1297)年前後である。書写終了年月日順に並べると(【表2】)のようになる。筆写された背景がわからないものは26冊であるが、これは西山本全体の半数にあたる。さらに26冊のうち「承空上人寄進之」という文言があり、承空の手元にあったと判断される本が、(6)(7)(8)(9)(11)(12)(13)(16)(23)(50)(39)の11冊に上る。また、26冊のうち花押のないものは8冊に過ぎず、上述の考察から花押のあるものは承空の手にかかったとされるので、8冊の伝来を今後考察する必要がある。8冊のうち、(47)清誉・(48)恵空の2冊を除く、(3)(42)(49)(44)(51)(43)6冊が焦点になろう。(3)『小野篁集』はこれに含まれる。

しかし、残る半数は歌書が筆写された順番、場所、筆写者がわかる。これによれば、承空が西山往生院にて本格的に筆写活動を開始したのは、確かなところでは永仁四(1296)年七月の(41)『言葉唱歌集』と(18)『山田集』の書写である。しかし、その直前(46)『曾祢好忠集』も承空の署名がないものの、奥書の「本云/永仁三年六月十二日於西山/善峯北尾菊坊書写了」に着目すると、(29)『道命阿闍梨集』の「永仁五年正月十九日/於西山善峯寺北尾/往生院菊坊松窓/書写之了/承空/于時残雪満山似催於/春花薄氷結池不巽/於冬水而已」や(37)『行尊大僧正集』の「(前略)/永仁五年二月三日於西山善峯寺/北尾往生院菊坊/松窓書写了」との表記が類似していることや書写時期が近接していることから、承空による書写と考えてもよさそうである。

永仁五(1297)年の書写活動は、一月中旬から四月中旬の三カ月間に集中して行われている。永仁六(1298)年は、先にみたように五月末から六月末にかけての一ヶ月、京都の室町宿所におそらく滞在して承空自身によって筆写が行われた。翌年の正安元(1299)年の十一月に(20)『義孝朝臣集』と(32)『家経朝臣集』を筆写したあたりを最後に、西山を中心とした歌書の筆写活動は終焉に向かったと考えられる。

おわりに

小稿では、西山本の表紙にかかれた花押と奥書を手掛かりに基礎的な考察を重ねてきた。前者からは、現存の状態では花押が見られなかった本も、もともとは花押が存在していたと考えることができ、西山本のうち、狭義での承空本(1)

範永朝臣集〔真観筆 建長六年写 重要文化財〕
為頼朝臣集〔真観筆 鎌倉時代中期写 重要文化財〕
在良朝臣集〔真観筆 鎌倉時代中期写 重要文化財〕のほか、
能因集〔晴祐筆 弘安八年写 重要文化財〕
大式高遠集〔真観監督書写 鎌倉時代中期写 重要文化財〕
家経朝臣集〔真観監督書写 鎌倉時代中期写 重要文化財〕
中納言俊忠集〔真観監督書写 寛元四年写 重要文化財〕
匡衡朝臣集〔真観監督書写 鎌倉時代中期写 重要文化財〕
為仲朝臣集〔真観監督書写 鎌倉時代中期写 重要文化財〕
元良親王集〔真観監督書写 鎌倉時代中期写 重要文化財〕
大納言経信集〔真観監督書写 鎌倉時代中期写 重要文化財〕
顕綱朝臣集〔真観監督書写 鎌倉時代中期写 重要文化財〕
侍従大納言成通集〔真観監督書写 鎌倉時代中期写 重要文化財〕

が所収されている。真観直筆のほかに監督したものも含まれるが、これらと西山本の関係はさらなる分析が必要である。田中登「範永朝臣集・解題」(『冷泉家時雨亭叢書』63巻、2007年)。

10. 久保木哲夫「山田集・解題」(『冷泉家時雨亭叢書』69巻、2002年)。

11. 拙稿注(1) 論文参照。

* 本文に引用した写真は、すべて『冷泉家時雨亭叢書』69巻・70巻・71巻72巻(朝日出版社、2002年、2006年、2007年、2004年)から部分拡大してしたものである。

【表1】承空本を含む西山本一覧（2020年現在）

冷泉家時雨亭文庫所蔵文書						
西山本	承空本		歌書名	筆写年代	表紙	
西山本	承空本 (私家集)	1	赤人集			花押
		2	家持卿集	永仁6年	1298年	花押
		3	小野篁集			なし
		4	小野小町集	永仁5年	1297年	花押
		5	業平朝臣集	永仁6年	1298年	花押
		6	敏行朝臣集			花押
		7	躬恒集			花押
		8	忠岑集			花押
		9	是則集			花押
		10	伊勢集	永仁5年	1297年	花押
		11	貫之集 上			花押
		12	貫之集 中			花押
		13	貫之集 下			花押
		14	増基法師集			欠
		15	清正集	永仁6年	1298年	花押
		16	大中臣頼基集			花押
		17	安法法師集	永仁5年	1297年	花押
		18	山田集	永仁4年	1296年	菊坊
		19	藤原元眞集	永仁6年	1298年	花押
		20	義孝朝臣集	正安元年	1299年	花押
		21	為信集			欠
		22	御形宣旨集	永仁5	1297年	花押
		23	元輔集			花押
		24	鴨女集	永仁5年	1297年	花押
		25	時明朝臣集			花押
		26	実方朝臣集			花押

奥書	署名	叢書	形状	資経本との異同
なし	なし	69.1	横長本	○ (時雨亭叢書 65/1)
永仁六年六月廿五日 / 於室町宿所書写了 / 承空 (別筆) 承空上人 / 寄進之	承空	69・2	横長本	○ (時雨亭叢書 65/2) 永仁 2 書写
なし	なし	69・3	横長本	
本云 / 建長六年七月廿日重校合于九 / 条三位入道本了 彼本哥六十 / 九首云々 安元二年十一月八日云々 / 正応五年十二月九日令侍中 / 詹事丞尚書之即之校了 / 藤資経 / 永仁五年三月十五日於西山房 / 書写了 承空 / 承空上人 / 寄進之	承空	71・4	枅形本	
承空上人 / 寄進之 (同筆) 永仁六年五月廿八日 / 書写了	なし	69・4	横長本	
承空上人 / 寄進之	なし	71・6	枅形本	
承空上人 / 寄進之	なし	71・7	枅形本	
承空上人 / 寄進之 / にしやま	なし	69・5	横長本	
承空上人 / 寄進之	なし	69・6	横長本	○ (時雨亭叢書 65/9) 永仁 2 書写
永仁五年三月廿八日於西山 / 菊房令書写了 / (別筆) 承空上人 / 寄進之	なし	69・7	横長本	○ (時雨亭叢書 65/8) 永仁 1 書写
承空上人 / 寄進之	なし	69.8	横長本	
承空上人 / 寄進之	なし		横長本	
承空上人 / 寄進之	なし		横長本	○ (時雨亭叢書 65/11) 正応 6 書写
なし	なし	69・9	横長本	○ (時雨亭叢書 66/21) 永仁 1 書写
永仁六年六月八日於 / 室町宿所書写了 / 承空 (別筆) 承空上人 / 寄進之	承空	69・10	横長本	
承空上人 / 寄進之	なし	69・11	横長本	
永仁第五之曆正月 / 中旬之候於草庵 / 深窓書写之詔 / 右筆 (花押)	右筆 花押	69・12	横長本	○ (時雨亭叢書 66/20) 永仁 2 書写
永仁四年七月十三日於西山往 / 生院菊坊書写了 / 承空	承空	69・13	横長本	
永仁六年六月廿四日於 / 室町宿所書写了 / 承空 (別筆) 承空上人 / 寄進之	承空	69・14	横長本	○ (時雨亭叢書 66/16) 永仁 1 書写
正安元年十一月十二日 / 西山往生院草庵 / 書写了 承空	承空	70・20	横長本	
なし	なし	70・21	横長本	○ (時雨亭叢書 67/23) 永仁 2 書写
永仁五年三月廿九日於西山 / 菊坊書写了	承空	70・22	横長本	
承空上人寄進之	なし	70・23	横長本	
永仁五年三月十八日於西山 / 菊坊書写了 承空 / 写本散々之間乍不審書之 / 不及校合以證本可見合也	承空	71・24	枅形本	
なし	なし	70・25	横長本	○ (時雨亭叢書 68 / 断)
なし	なし	71・26	枅形本	○ (時雨亭叢書 67/28) 永仁 2 書写

西山本		27	清少納言集	永仁5年	1297年	花押	
		28	重之女集	永仁5年	1297年	花押	
		29	道命阿闍梨集	永仁5年	1297年	花押	
		30	大中臣輔親集			花押	
		31	帥大納言母集	永仁5年	1297年	花押	
		32	家経朝臣集	正安元年	1299年	花押	
		33	範永朝臣集	永仁3年	1295年	欠	
		34	藤三位集	永仁5年	1297年	花押	
		35	京極大殿御集	永仁5年	1297年	花押	
		36	顯綱朝臣集			花押	
		37	行尊大僧正集	永仁5年	1297年	花押	
		38	基俊朝臣集			花押	
		39	信生法師集			表紙1/ (表紙2) 歌集 蓮 生 暇 歟 花押	
		40	城美の前司集			欠	
		承空本 (私撰集)	41	言葉と歌集 下	永仁4年	1296年	承空
		承空本 (歌合)	42	奈良花林院歌 合			
			43	歌合			
			44	朝光集(断簡)			
			45	四条宮下野集	正和2年	1313年	表紙なし
			46	曾祢好忠集	永仁4年	1296年	なし
		清誉	47	柿本人麿集			清誉
	恵空	48	範宗家集	文永10年	1273年	恵空	
		49	猿丸集				
	義空	50	忠見集			花押	
		51	曾丹集				

永仁五年二月十二日於西山房 / 書写了承空	承空	70・27	横長本	○ (時雨亭叢書 67/29) 永仁 1 書写
永仁五年二月十七日於西山 / 房書写了承空	承空	70・28	横長本	
永仁五年正月十九日 / 於西山善峯寺北尾 / 往生院菊坊松窓 / 書写之了 / 承空 / 于時殘雪滿山似催於 / 春花薄氷結池不巽 / 於冬水而已	承空	70・29	横長本	
なし	なし	70・30	横長本	
永仁五年三月廿六日於西山房 / 書写了	なし	70・31	横長本	
正安元年十一月十二日 / 於西山往生院書写了 / 承空	承空	70・32	横長本	○ (時雨亭叢書 67/31) 永仁 2 書写
永仁三年五月十九日於 / 西山往生院書写了 / 右筆屋々丸 (花押)	右筆花 押屋々 丸	70・33	横長本	
永仁五年三月 29 日於西山 / 菊坊書写之了 承空	承空	70・34	横長本	○ (時雨亭叢書 68/33) 永仁 1 書写
永仁五年四月十五日 / 於西山往生院菊坊 / 教人書写之訖	なし	70・35	横長本	○ (時雨亭叢書 68/ 断)
なし	なし	70・36	横長本	○ (時雨亭叢書 68/34)
本云 建久四年三月十日 / 書写了 / 又本云弘安七年十一月二日校合了 / 本不読解間不審事等 / 多之 / 永仁五年二月三日於西山善峯寺 / 北尾往生院菊坊 / 松窓書写了 承空 (花押)	承空	71・37	枅形本	○ (時雨亭叢書 68/35) 永仁 2 書写
なし	なし	70・38	横長本	
(表紙 2 裏) 写本散々大略 / 文字形不見任也 / 仍任本書留之了 / 或少々加愚推背本 / 書之事数所勞 / 難指南尋出証 / 本校合可治定 / 者也 / 承空	(裏表 紙) 承 空	70・39	横長本	
なし	なし	70・40	横長本	
永仁 4.7.12 西山承空・真木野御方法印御坊所持本を筆写	(表紙) 承空	7		
なし	なし	49・42		
文治 2 (1185) 年	なし	49・43		
なし	なし	70・付録	横長本	○ (時雨亭叢書 67/26) 正応 6 書写
本云治承四年三月十五日 / 書之 / 寛元四年十二月七日書写 / 之 / 正和二年十二月十五日 (欠) / (欠) 也写本散々不審 / (欠)	不明		横長本	
本云 / 永仁三年六月十二日於西山 / 善峯北尾菊坊書写了	なし	71・無	縦長本	○ (時雨亭叢書 67/25)
なし	清誉	72・6		
なし	恵空	72・8		
なし	なし			○ (時雨亭叢書 65/2) 永仁 2 書写
承空上人 / 寄進之	義空	71・無	縦長本	
なし	なし			

【表2】書写年代からみた書写順序

	歌書名	筆写年代		表紙	奥書	署名	場所
1	赤人集		0	花押	なし	なし	
3	小野篁集		0	なし	なし	なし	
6	敏行朝臣集		0	花押	承空上人 / 寄進之	なし	
7	躬恒集		0	花押	承空上人 / 寄進之	なし	
8	忠岑集		0	花押	承空上人 / 寄進之 / にしやま	なし	にしやま
9	是則集		0	花押	承空上人 / 寄進之	なし	
11	貫之集 上		0	花押	承空上人 / 寄進之	なし	
12	貫之集 中		0	花押	承空上人 / 寄進之	なし	
13	貫之集 下		0	花押	承空上人 / 寄進之	なし	
14	増基法師集		0	欠	なし	なし	
16	大中臣頼基集		0	花押	承空上人 / 寄進之	なし	
21	為信集		0	欠	なし	なし	
23	元輔集		0	花押	承空上人寄進之		
25	時明朝臣集		0	花押	なし	なし	
26	実方朝臣集		0	花押	なし	なし	
30	大中臣輔親集		0	花押			
36	顕綱朝臣集		0	花押	なし	なし	
38	基俊朝臣集		0	花押	なし	なし	
39	信生法師集		0	表紙1 / (表紙2) 歌集蓮生暇歎花押	(表紙2裏) 写本散々大略 / 文字形不見任也 / 仍任本書書留之了 / 或少々加愚推背本 / 書之事数所勞 / 難指南尋出証 / 本校合可治定 / 者也 / 承空	(裏表紙) 承空	
40	城美の前司集		0	欠	なし	なし	
42	奈良花林院歌合		0	なし			
47	柿本人麿集		0	清誉		清誉	
49	猿丸集		0	なし			
50	忠見集		0	花押	承空上人 / 寄進之	義空	
44	朝光集 (断簡)		0	不明	欠	欠	
51	曾丹集		0	なし			
43	歌合		11850000	なし	文治2 (1185) 年		
48	範宗家集	文永10年	12730000	恵空		恵空	
33	範永朝臣集	永仁3年	12950519	欠	永仁三年五月十九日於 / 西山往生院書写了 / 右筆屋々丸 (花押)	右筆花押屋々丸	西山往生院
46	曾祢好忠集	永仁4年	12960612	なし	本云 / 永仁三年六月十二日於西山 / 善峯北尾菊坊書写了		西山善峯北尾菊坊
41	言葉と歌集下	永仁4年	12960712	承空	永仁4.7.12 西山承空・真木野御方法印御坊所持本を筆写	(表紙) 承空	西山
18	山田集	永仁4年	12960713	菊坊	永仁四年七月十三日於西山往 / 生院菊坊書写了 / 承空	承空	西山往生院菊坊
17	安法法師集	永仁5年	12970115	花押	永仁第五之曆正月 / 中旬之候於草庵 / 深窓書写之訖 / 右筆 (花押)	右筆花押	草庵

29	道命阿闍梨集	永仁5年	12970119	花押	永仁五年正月十九日／於西山善峯寺北尾／往生院菊坊松窓／書寫之了／承空／于時殘雪滿山似催於／春花薄氷結池不異／於冬水而已	承空	西山善峯寺北尾往生院菊坊松窓
37	行尊大僧正集	永仁5年	12970203	花押	本云 建久四年三月十日／書寫了／又本云弘安七年十一月二日校合了／本不説解間不審事等／多之／永仁五年二月三日於西山善峯寺／北尾往生院菊坊／松窓書寫了 承空(花押)	承空	西山善峯寺北尾往生院菊坊松窓
27	清少納言集	永仁5年	12970212	花押	永仁五年二月十二日於西山房／書寫了 承空	承空	西山房
28	重之女集	永仁5年	12970217	花押	永仁五年二月十七日於西山／房書寫了 承空	承空	西山房
4	小野小町集	永仁5年	12970315	花押	本云／建長六年七月廿日重校合于九／条三位入道本了 彼本哥六十／九首云々 安元二年十一月八日云々／正応五年十二月九日令侍中／詹事丞尚書之即之校了／藤資経／永仁五年三月十五日於西山房／書寫了 承空／承空上人／寄進之	承空	西山房
24	鴨女集	永仁5年	12970318	花押	永仁五年三月十八日於西山／菊坊書寫了 承空／寫本散々之間作不審書之／不及校合以證本可見合也	承空	西山菊坊
31	帥大納言母集	永仁5年	12970326	花押	永仁五年三月廿六日於西山房／書寫了		西山房
10	伊勢集	永仁5年	12970328	花押	永仁五年三月廿八日於西山／菊坊令書寫了／(別筆)承空上人／寄進之	なし	西山菊坊
22	御形宣旨集	永仁5年	12970329	花押	永仁五年三月廿九日於西山／菊坊書寫了	承空	西山菊坊
34	藤三位集	永仁5年	12970329	花押	永仁五年三月廿九日於西山／菊坊書寫了之 承空	承空	西山菊坊
35	京極大殿御集	永仁5年	12970415	花押	永仁五年四月十五日／於西山往生院菊坊／教人書寫之訖	なし	西山往生院菊坊
5	業平朝臣集	永仁6年	12980528	花押	承空上人／寄進之(同筆)永仁六年五月廿八日／書寫了	なし	
15	清正集	永仁6年	12980608	花押	永仁六年六月八日於／室町宿所書寫了／承空(別筆)承空上人／寄進之	承空	室町宿所
19	藤原元眞集	永仁6年	12980624	花押	永仁六年六月廿四日於／室町宿所書寫了／承空(別筆)承空上人／寄進之	承空	室町宿所
2	家持卿集	永仁6年	12980625	花押	永仁六年六月廿五日／於室町宿所書寫了／承空(別筆)承空上人／寄進之	承空	室町宿所

20	義孝朝臣集	正安元年	12991112	花押	正安元年十一月十二日 / 西山往生院草庵 / 書写了 / 承空	承空	西山往生院 草庵
32	家經朝臣集	正安元年	12991112	花押	正安元年十一月十二日 / 於西山往生院書写了 / 承空	承空	西山往生院
45	四条宮下野集	正和2年	13130315	表紙なし	本云治承四年三月十五日 / 書之 / 寛元四年十二月七日書写 / 之 / 正和二年十二月十五日(欠) / (欠)也写本散々不審 / (欠)	不明	